

## 〔研究ノート〕

## 英語の諺とシェイクスピア

下 島 連

## (1)

‘Homer sometimes nods’. 「弘法も筆の誤り」と全く同じ意味に使われている諺であるが、西洋文学における初出はホラティウスの *Ars Poetica* 402 行 *Quandoque bonus dormitat Homerus* であることは余りにも有名。この言いまわしがホラティウスに先立ってすでにギリシアにあったとしても不思議ではない。いや本当にギリシアにあったかもしれない。ホメロスといえども四六時中インスパイヤーされているわけではなく、ときおりこっくりこっくりすることがあるというイメージはいかにも温かく人間的だ。それに、どういふものかこの盲目の詩聖をかなり高齢の老人と思いたい。もちろん「弘法も筆の誤り」にも同じ温かさがある。これは人の失敗を、それもすぐれた技倆の人の失敗を弁護するときに使われる諺であって、自分の失敗を弁護するために使われることは絶対にないからであろう。

*The Oxford Dictionary of English Proverbs* 第三版によると（以下 ODEP と略す）1530年刊行の John Palsgrave の書に、ホラティウスの名前をあげることなしにホメロスについてこのことが初めてイギリスの読者に紹介され、ロバート・バートンは *The Anatomy of Melancholy* (1621年刊) の総序ともいふべき「デモクリトス・ジュニア―から読者へ」のなかで、「名人もときに誤ることがある」という意味の文章につづいてホラティウスのこの言葉をラテン語のまま挙げている。ODEP はさらに 1674 年のドライデンの用例を挙げている。ドライデンはこのラテン語を *Homer nods some-*

times と訳している。

私のさし当っての関心はホメロス、弘法という名人中の名人といえども、ときに誤ることがあるという発想が東西全く同一であるという点にある。

「鶏口となるとも牛後となることなかれ」は古代中国戦国時代の有名な故事から来ていて、わが国でも古くから広く使われて来た諺的言いまわし (proverbial saying) であるが、これと全く同じ発想が西の国にもある。

‘Better be the head of a dog than the tail of a lion.’

‘Better be the head of an ass than the tail of a horse.’

‘Better be first in a village than second at Rome.’

「村でのトップの地位はローマでの二番目の地位よりもましだ」という意味のこの最後の言葉は、ガリアの地を踏んだときのジュリアス・シーザーの言であるとプルタルコスはその「英雄伝」で伝えている。大企業の平社員であるよりは、小なりといえども、個人企業のトップに坐る方がましだという心意気は今も昔も、そして西も東も変りがなさそうだ。

腕の悪い職人にかぎって、自分のだめな腕を棚にあげて、道具のせいにするのはどこの国でも同じらしい。

‘A bad workman always blames his tools.’

‘Never had ill workman good tools.’

これに対して、心がけのよい、腕のたしかな職人はいつも道具を大切にする。「弘法筆を選ばず」は本当かもしれないが、「弘法の筆選び」はもってと真実であろう。

諺には東も西も同じ発想に基づくものが多いということを十分に納得してもらうために、思いつくままに実例をあげることにする。

‘Constant dropping wears the stone.’

(点滴 石をうがつ。)

‘The danger past and God forgotten.’

(苦しい時の神だのみ。)

'A word to a wise man is enough.'

(賢者は一を聞いて十を悟る。)

'To kill two birds with one stone.'

(一石二鳥。)

'Too many cooks spoil the broth.'

(船頭多くして船山に登る。)

'To cast pearls before swine.'

(猫に小判。)

'A near neighbour is better than a far-dwelling kinsman.'

(遠くの親戚より近くの他人。)

'Seeing is believing.'

(百聞は一見にしかず。)

'If you run after two hares, you will catch neither.'

(二兎を追う者は一兎をもえず。)

'Apparel makes the man.'

(馬子にも衣装。)

'Ill news comes apace.'

(悪事千里を走る。)

'A fair face and foul heart.'

(外面は菩薩の如く、内心夜叉の如し。)

'It is ill putting sharp weapon in a mad man's hand.'

(気がいかに刃物。)

'Of a small spark a great fire.'

(マッチ一本火事のもと。)

‘Two heads are better than one.’

(三人寄れば文珠の知恵。)

‘Bitter pills may have blessed effects.’

(良薬口にいがし。)

‘There’s no need to smash eggs with sticks.’

(鶏を割くになんぞ牛刀を用いん。)

‘Misfortunes seldom come alone.’

(弱りめにたたりめ。)

‘The belly is the truest clock.’

(腹時計にくるいなし。)

‘There is a salve to every sore leaving only love remediless.’

(恋いの病いだけは効く薬がない。)

この「腹時計」とか「お医者様でも草津の湯でも」という経験もしくは発想が全く同じであることは偶然の一致とはいいいながら甚だ面白い。

以上の例によって、同じ発想に基づく諺が地球上の各地で独自に生み出されていることが判るであろう。しかし、諺は文化交流の流れに乗っていても容易に一つの言語社会から他の言語社会に移されるので、たとえば「点滴石をうがつ」、は明治期に ‘Constant dropping wears the stone’ から日本語に訳されたように思われるし、また、英語の ‘If you run after two hares, you will catch neither.’ は中国の古語である「二兎を追う者は一兎をもえず」から英訳されたように思えてならない。筆者はこのことを断定する用意がないので将来の課題として取っておくとして、とにかく諺には各言語集団に共通のものがすくなくないということ、また諺は小鳥のように容易に国境を越えるという事実は認めなければならない。そういう意味

で諺はどここの国でも理解される一種の国際語の性質をそなえている。

なぜ、そうなのか。その理由は簡単だ。金銭、親子、夫婦、友人、家畜、農耕、天候といった人間生活の基本的な面を諺は扱っているので、人間性が今も昔も、東も西も基本的に変わらない以上、各地の人々が同じ経験に対して同じ反応を示すのは当然であろう。

日本の諺を考えてみると、日本で生れたと思われるもの、中国の古典や故事がもとになっているもの、仏典に由来するもの、それに明治以降西欧語から訳されて日本の諺になっているものなどその起源は種々雑多である。どこの国の諺についても同じことが言える。そして英語には後にのべる特別の理由によって特に雑多な要素が流れ込んでいるようである。

こうして、諺には各言語集団に共通のものがすくなくないが、同時に so many countries, so many proverbs (処かわれば諺もかわる) ということも真実であろう。つまり諺のなかにはそれぞれの国民の独自の考え方、独自の生活様式が反映されている。たとえば、日本の諺とイギリスの諺を全体として比較すれば、そこに共通のものが見出されると同時に、異なるものが見出されるであろう。こうして諺の比較研究は比較社会学あるいは比較文化人類学の一分野になるのではないだろうか。

これは個人研究者が着手しうる分野ではなく、当然のことながら共同研究が要求される分野である。本学に関していえば、言語文化研究所が中心になって日本語ならびに各外国語の専門家が集ってそれぞれの言語集団に伝えられる諺を持ち寄り、それを比較対照して異同を明らかにし、伝播をあとづけることは意味のないことではないと思われる。

順序が逆になっているかもしれないが、次に手もとにある辞典によって諺(proverb)の定義ををしらべてみよう。 *Concise Oxford Dictionary* によると 'short pithy saying in general use, adage, saw.' (広く使われている短い鋭い言葉、格言、金言) と定義している。 *The Advanced Learner's Dictionary of Current English* によると、 'popular short saying, with words of advice or warning' (警告もしくは忠告の意味をとまなう広く知られている短い言葉)、

*Webster's New International* によると, 'A brief epigrammatic saying that is a popular byword; an oft repeated pithy and ingeniously turned maxim... the wisdom of the street' (広く使われている短く鋭い言葉, しばしばくり返される含蓄のある, かつ巧妙な言いまわしの格言…民衆の英知)。「広辞苑」は「古くから人々に言いならわされた言葉, 教訓, 諷刺の意を寓した短句や警句。」

これらの定義を総合すると諺のおおよその性質が浮かびあがる。すなわち短いということ, なるほどと思わせるものを具えていること, 言いまわしが面白く記憶しやすいこと, 一般人の英知の結晶であること。従って多くの場合, 作者不明である。

しかし, 英語の諺辞典にも日本の諺辞典にも, このほか深い意味のない, きまり切った言いまわし, すなわち慣用句が多く集められている。「おそかりし由良助」とか 'before one can say Jack Robinson' といった言いまわしがこれに相当する。これはクリーシェ cliché と見られるかもしれない。あるいは多くの現代人にとって諺もクリーシェなのかもしれない。

それはさておいて, これらの慣用句を列挙してみる。

as black as a crow, black as the devil, as white as a swan, white as ivory, as red as blood, as red as rose, as gentle as lamb, as swift as thought, as proud as peacock, as heavy as lead といった比喩はその代表的なものである。その他 in the twinkling of an eye, between Scylla and Charybdis, bitter pill, halcyon days, palmy days といった言いまわし。また a white raven (白いからす), a black swan (黒い白鳥) という面白い慣用句も ODEP に収められている。

諺について述べておきたいことがもう一つある。諺は反面の真実を述べていることが多いので, しばしばそれとは反対の意味をあらわす諺がある。たとえば,

The face is no index to the heart.

The face is the index of the heart.

Man is to man a God.

Man is a wolf to man.

Money ruins many.

Money is the key that opens all doors.

Many hands make light work.

Too many cooks spoil the broth.

辞典というものはどのような種類のものであれ、読んで面白いものであるが、英語の文化的背景についての知識を深めるには英語の諺を多く知ることが一つの道ではないかと思って、かなりの時間をかけてこの冬 OEDP を通読した。そして非常に有益かつ面白いと思った。しかし、読むだけでは、片っぱしから忘れてしまう恐れがあるので、シェイクスピアの作品に使われている諺、あるいは諺的言いまわし (proverbial saying) だけは読みながらノートすることにした。そして、そのノートを使って本稿を草している次第だ。

先きに進む前に OEDP の構造について一言。この辞典の第三版 (1970 年刊) は 930 ページ、正確に数えたわけではないが約一万のイギリスの諺が収められている。その大部分を占めている古い諺は 1950 年にミシガン大学から発行された M. P. Tilley: *Dictionary of the Proverbs in English in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* に収められている形をそのまま採用し、それぞれの諺についてそれが最初に現われている文学作品、古記録、著述、説教、パンフレットとその年代が明記され、その最初の形が引用されている。そして 15 世紀、16 世紀、17 世紀の用例が年代順に掲げられている。聖書やギリシア、ローマの古典に由来するものは各諺の用例の最初にその典拠が明示されており、Tilley の辞典の対象になっている 16 世紀、17 世紀以後に現われた諺や諺的言いまわしについても、初出の作品や書物からの引用とその刊行の年が明記されている。しかし、数の上からいって 17 世紀以前の諺が圧倒的に多い。中世から 16、17 世紀にかけて諺の全盛時代であっ

て、文章や説教や日常会話のなかに極めて頻繁に諺が使われていた。

1738年刊行の Jonathan Swift: Genteel and Ingenious Conversation は殆どすべてのやり取りが諺で成立しているこの上もなく愉快的戯文である。スウィフトはこうした無内容な戯文でもって、当時における諺の多用を諷刺したのだ。18世紀になると諺の全盛期は終り、19世紀、20世紀にはますます諺の使われる頻度が落ちている。ディケンズ、トロロープ、ハーディーの作品には諺が多く出るが、それは下層社会、もしくは教育のない人々を描くのに諺の使用が適しているためらしい。

諺はその性質上一つの言語集団の共有の財産であり、従って伝統的生活様式と固く結びついている。社会の変化がはげしく、個人意識が強くなって伝統文化に対する理解や関心が弱くなるにつれて諺は急速に忘れられつつある。これは日本だけでなくアメリカ、イギリスでも若者の間に起っている現代の傾向である。

ジェームズ・カーカップ氏の *Proverbs Are International* (1977年朝日出版)によると、現代アメリカの若者の書く能力と話す能力の低下は驚くべきものがあるとのこと。正確かつ流暢に話す能力の恐るべき喪失は語彙の不足と若者が諺を全く知らないために起こっているとカーカップ氏は判断している。事情はそれほど簡単だとは思わないが、すくなくとも諺は人間関係についてある観念、もしくはある判断を非常に簡潔に表現している。そういうものを数多く頭の中に入れている者は、そういうものを全然知らない者に比べて、比較にならないほど確かな人間関係についての土台の上立っていることは否定できない。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す。奢れる者久しからず、ただ春の夜の夢のごとし……」平家物語の冒頭の文章を思い出すたびに日本語に流れ込んでいる中国や仏典の要素の重大さを思う。

ODEPに収められている英語の諺は聖書に由来するもの、ギリシア、ローマの詩人や哲学者の書いたもの、1066年のノルマン人による征服はもと



よりのこと、中世および近世初期にフランス、イタリア、スペイン、オランダから入ったもの、アングロ・サクソン人古来のもの、さらにスコットランド系のもの、ヴァイキングが持ち込んだものなどが入り乱れていて、その多彩さは驚くべきものがある。シェイクスピアが現われたときの英語がいかに豊かで活力にあふれていたかを ODEP を読むことによって非常にいきいきと実感することができたことはありがたかった。それは単に語彙の問題ではない。各単語はもちろん観念を代表しているが、一つの諺、もしくは諺的言いまわしは観念以上の思想を現わしているのだ。たとえば、ODEP について「人間は」という言葉で始まる諺を見るがよい。そこには非常に多くの人間観が陳列されている。シェイクスピアはこの内容の豊かなそしてまた文法によって拘束させることのすくない自由な活力にあふれている言語を縦横に駆使したのである。

ODEP を読みながらシェイクスピアと英語の諺もしくは proverbial expression について考えるとき、三つの場合が考えられる。(1) 当時使われていた諺を殆どそのまま使っている場合、これは数の上でそう多くない。(2) 当時知られていた諺の背後にある考え方に新しい表現を与える場合、このケースは非常に多い。(3) シェイクスピア自身が創り出した表現。そして (1) や (2) の場合でも、特に (2) の場合、シェイクスピアがそれを効果的に使ったために慣用語としてシェイクスピアが与えた形で (3) の場合とならんでその後の英語のなかに定着するようになったものが多い。

シェイクスピアからの引用がその後の英語もしくは英文学作品のなかでいかに多いかは、たとえば *The Kenkyusha Dictionary of English Quotations* を見れば判る。本文 851 ページのうち、聖書から引用の占める量は 399 ページ、シェイクスピアの作品からの引用の占める量は 217 ページ、残りの 233 ページは百数十名の詩人、小説家、学者、思想家からの引用。聖書は別格として、シェイクスピアからの引用がいかに多いかがうかがわれよう。「シェイクスピアも悪くないがどうも引用が多くてね」という笑話があるゆえんである。ついでながら研究社発行のこの辞典は英米にも類をみない

甚だすぐれた労作だ。

先きに述べたように、OEDPを通読してシェイクスピアの作品からの引用をノートした。それは千を越える大きな数である。それを分類整理することも考えられるが、今回はその用意がない。

今回は ODEP に引用されているシェイクスピアからの引用のほんの九牛の一毛にも足りないがアト・ランダムに用例を挙げて英語の諺とシェイクスピアの作品について考察してみる。

## (2)

‘One hates not the person, but the vice.’

この英語と驚くほど似ている「罪をにくんで人をにくまず」は孔子をはじめとする弟子たちの言行を分類してのせた「孔叢子」という本に出ている言葉で、日本でも古くから識者の間に知られている。「坊主にくけりゃ袈裟までにくい」(‘He who hates Peter harms his dog.’) が幼稚もしくは未開の心理状態を示しているのに対して、この諺は高度の文明状態を示している。こうした言葉を本当に体得することが文明人、もしくは教養人の一つの資格かもしれない。ODEP によるとイギリスではこの諺は Tyndale: *Enchiridion* (1533) に ‘We must defye and abhorre the vices, but not the man.’ という形で初めて出ているが、もっと早くからこの言葉が使われていたかもしれない。Rodenham: *Wit’s Commonwealth* (1597) には ‘We ought not to hate the man, but his vices’ とある。シェイクスピア *Measure for Measure* (1604) II.ii. 37行に ‘Condemn the fault, and not the actor of it.’ というセリフがあるが、これは明らかに前記のティンダルやロデナムの言葉をシェイクスピアが適当に言いかえたものであろう。シェイクスピアはこの言葉を読んだのではなく、どこかで耳にしたのかもしれない。彼は何といっても耳学問の大家であるから。それに当時の人々は今の人間ほど活字を読んでいないと思われる。新聞や小説などというものが殆どないこの時代の人々にとって酒を飲みながらの談笑や、日曜日毎のお説教や、

劇場などが彼らの耳学問の教室で、彼らは楽しみながら知識を吸収していたのだ。テレビ時代の現代の若者は活字離れの傾向があるので、耳学問の時代が再びやって来ているのかもしれない。ただしシェイクスピアのあの長い、複雑な言いまわしのセリフを聴き取って楽しんだ当時の観客の耳のよさと教養の高さは相当のものだと評価せざるをえない。

Othello, V.ii. 285行。憎んで余りある、あるいは余りといえば余りのイアーゴの所業が明らかになるや、オセロは心のなかにたぎる怒りを抑えることができない。オセロに取って、イアーゴは人間ではなく悪魔である。オセロの前に引き立てられて来たイアーゴを見て、オセロは言う。‘I look down towards his feet, but that a fable.’ (「やつの足もとに目をやった。だが、あれは作りごとだった」) イアーゴが悪魔でなかったら、ほかに悪魔などあるはずがないという気持。しかるにやつの足を見ても人間の足と変りない、諺で言われているような悪魔の足ではない。そうだとすると、「悪魔の足には鉤爪(かぎつめ)が生えている」という諺(‘Devil is known by his claws.’) はただの作りごとだったのだ。イアーゴが悪魔でなくてほかに悪魔があるはずがないということを最も強く言ったことになる。「あれは」というのは「あの諺は」という意味。ということは、この諺は当時誰一人として知らない者がなかったことを意味する。

エリザベス朝の人々にとって幽霊は実在していたが、それ以上に悪魔も実在していたのだ。幽霊については「ハムレット」に現われる父ハムレット王の幽霊や「マクベス」の劇中に現われるバンコウの幽霊などがあるが、魔女狩り(witchを魔女と訳してしまったので具合が悪い。男のwitchもあり、女のwitchもあったと承知願いたい)という形で、非常に多くの、われわれには考えられないほど多数の男女が当時ヨーロッパで悪魔と契約した者、もしくは悪魔の手先ぎとして殺された。1692年のマサチューセッツ州セイラムの魔女騒動をほぼ最後にこの騒ぎは収まるが、15世紀、16世紀、17世紀の三百年間に十数万あるいは百万以上の人間が悪魔に買収され、悪

魔の手下になった者として殺された。

マーロウの「ファウスト博士」は当時の人々にとって極めて重大な問題を扱っていたのだ。そのなかに 'I'll tell you how you shall know them; all he-devils has horns, and all she-devils has cliffs and cloven feet.' という道化師のセリフがある。これによると男の悪魔には角（つの）が生えており、女の悪魔の足には割れた蹄（ひづめ）がついていたことになる。割れた蹄とは牛や山羊の蹄のこと。絵に描かれている悪魔の足は山羊のそれに近い。

悪魔に関する学問、すなわち神学 (theology) と対照的な悪魔学 (demonology) というものが当時あって James I にも悪魔学についての著述があり、シェイクスピアは「マクベス」に魔女を登場させたとき、ジェームズ一世の著書に出て来る魔女を強く意識しないはずがなかったと碩学 Dover Wilson は The New Shakespeare 版「マクベス」の序文に書いている。「マクベス」という作品はエリザベス女王亡きあと、スコットランドから入ったジェームズ一世の治下に書かれ、スコットランド王家の歴史に関係のある作品であるから Dover Wilson の指摘は無視できない。この世界は神と悪魔の抗争の舞台であり、人間を神の陣営にひきつけておくことが神の最大の関心事であり、これに対して人間を誘惑して神に背かせることが悪魔の関心事であるらしい。ここは悪魔学に深入りすべき場所ではないが、一読したことがあるものとして Rossell Hope Robbins: *The Encyclopedia of Witchcraft and Demonology*, Barbara Rosen: *Witchcraft*, 森島恒雄著「魔女狩り」(岩波新書)の三書を挙げておく。信じられないようなことが書いてあって、西欧文明というものについて考えさせられることがすくなくない。

当時の西欧人にとって、神について考えるとき、つねに悪魔が想起された。ODEP には悪魔 (devil) で始まる諺が 75 も収められている。これは驚くべき数ではないだろうか。シェイクスピアの作品に現われる悪魔に関するものをもう二つ三つ挙げておく。

‘The devil sometimes speaks the truth’ という諺をシェイクスピアは「リチャード三世」, I. ii. 73行で ‘O wonderful, when devils tell the truth’ というように利用している。また The devil rides on a fiddle stick (バイオリンの弓に乗った悪魔) という慣用句が「ヘンリー四世」第一部 II. iv. 470行に出て来る。プリンス (後のヘンリー五世) やフォルスタフが例の Boar Head で飲み食いしていると、バードルフが取締りの役人がやって来ると叫んで駆け込んで来る。お神がそのことをお客に告げる。そのとき、プリンスはすこしも騒がず、‘Heigh, heigh! The devil rides upon a fiddlestick: What the matter?’ と言う。(悪魔がバイオリンの弓に乗るのは当り前のことで特に大騒ぎするほどのことではないという意味)

‘The devil can cite Scripture for his purpose.’ という諺を「ベネスの商人」, I. iii. 93行でアントニオはシャイロックに向かって極めて効果的に使っている。ここではシャイロックが悪魔扱いされているわけだ。これは「マタイによる福音書」四章六節から来ていて、ODEP ではシェイクスピアに先立って四つの用例が示されている。

‘Ale will make a cat speak.’

古いバラッド (Shirburn Ballads, 1585-1618) に ‘Who is it but loves good liquor? ’T will make a cat speak.’ という一節がある。アルコールが入ると、口の重い人も軽くなるということ。この諺は「テンペスト」II. ii. 78行で酒びんを手にして酔っぱらったステファノがキャリバンに向かって酒をすすめる言葉として ‘Here is that which give language to you, cat.’ というように使われている。ODEP に七つも用例が挙げられているので、かなりよく使われた諺であることが判る。これに関連して、‘When ale is in, wit is out’ というのがある。「アルコールが入ると、頭の方はからっぽになる」という意味。従ってお客の酒の上の言動について口をつむぐのが飲み屋のおやじのたしなみということになる。すなわち ‘Ale sellers should not be tale-tellers.’ そして、正直にすべてをぶちまけてはならない

のである。‘All truths are not to be told.’ しかし、人間というものは好奇心が強く、‘If the bed could tell all it knows’ (ベッドに口があったならさぞ面白いことを聞かしてもらえるだろう。いや、ベッドに口があったら、うっかりしたこともできないし、うっかりしたこともしゃべれない。)

「ハムレット」I. iii. 53-81行。パリーへ戻ってゆくレアティーズに対するポローニアスのこまごました注意。元気のいい若者に対する世俗的経験をつんだ老いたる俗物の忠告はこれすべて諺から成立しているといつてよい。28行のセリフの中に実に六つの諺が入っている。すなわち、

‘Give every man thine ear, but few thy voice.’

‘Neither a borrower, nor a lender be.’

‘Loan oft loses both itself and friend.’

‘Borrowing dulls the edge of husbandry.’

‘To thine own self be true.’

‘The apparel oft proclaims the man.’

これはおみごとというほかはない。これらの言葉にはせがれ思いのポローニウスという自信満々、ややおっちょこちよいの老人の性格がよく出ていて、スウィフトでなくても苦笑したくなるであろう。この ‘Give every man thine ear, but few thy voice.’ は ‘Hear much, speak little.’ という諺を言いかえたものだと思われるが、ODEP を通読して、沈黙をすすめる諺の数が多いことは印象的だった。「できるだけ多くの人の言うことに耳を傾けよ。ただしお前自身の考えを述べることはできるだけさし控えよ」というポローニアスの哲学は、封建時代を脱してまだ久しくない近世初期の老練な宮廷人の感覚であろう。

ODEP は ‘A bad custom is like good cake, better broken than kept’ という諺のをせ、この諺のもとにその用例として「ハムレット」I. iv. 15行の ‘It is a custom more honoured in the breach than the observance’

を挙げている。‘A bad custom...’ という諺がさきにあって、シェイクスピアはこれを言いかえてハムレットの有名なセリフを作り出したのだ。そして筆者の読書経験において、もとの形のものに出会ったことはないが ‘more honoured in the breach than the observance’ という言いまわしにはしばしば出会ったことがある。

与えられた紙数も尽きようとしているので、もう一つの例を挙げて拙稿を結ぶことにする。

OEDP を見ただけでも、たとえば人間についてのさまざまな観念がキリスト教や古代ギリシア、ローマの哲学者から当時のイギリス人に伝えられていたことが判る。この多様な人間観と多様な人間観を表現する豊富な言葉なしにシェイクスピアの作品に現われる多彩な人間群像を考えることはできない。

Nature abhors a vacuum (自然は真空をきらう) という観念は古代ローマから伝えられた哲学的な観念である。シェイクスピアの観客はこの言葉の意味をよく知っていたのだ。これを知らないで、「アントニーとクレオパトラ」II. ii. 224-226行の ‘Which (air), but for vacancy, had gone to gaze on Cleopatra too and made a gap in nature’ というエノパーバスのセリフの意味が判るはずがない。その意味は「真空をきらうという法則がなかったならば、空気もクレオパトラを見に行ってしまう、その結果、自然のなかに空隙を作ってしまったであろう」ということである。これは「自然は真空をきらう」という諺もしくは観念が一般に知られていることを前提としてクレオパトラの美しさを描くために創り出されたすばらしい詩だ。逆に言えば、シェイクスピアといえども、こうした素材が共有の財産として英語のなかに豊富にころがっていなかったならば、このような表現を創造することはできなかったであろうということである。ロンドンの酒場集まる芝居好きのロンドン子の活気に満ちた英語のなかからシェイクスピアの作品が生れたと結論してもよさそうだ。「ヘンリー四世」第一

部にしばしば出て来るにぎやかな飲み屋の場面が音響をともなって目の前に浮んでくる。